



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

# 現代日本語の体言を骨子とする非述定文の研究

著者	笹井 香
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029124">http://hdl.handle.net/10236/00029124</a>

氏 名	笹 井 香
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（言語学）
学 位 記 番 号	乙文第142号（文部科学省への報告番号乙第388号）
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	2020年2月28日
学 位 論 文 題 目	現代日本語の体言を骨子とする非述定文の研究
論文審査委員	（主査） 教 授 大 鹿 薫 久 （副査） 教 授 村 上 謙 教 授 小 田 涼 近 藤 要 司（神戸親和女子大学教授）

## 論文内容の要旨

笹井香氏から提出された博士学位申請論文「現代日本語の体言を骨子とする非述定文の研究」は、氏が手掛けてきた「非述定文」についての研究をまとめたものである。「非述定文」とは「形式上の主格と述格が存在せず、述語による言い定めに依らずに成立する文」のことであり、文構造上述語を持たない文と言い換えてもよい。日本近代文法論の嚆矢ともいえる山田孝雄『日本文法論』は述語によって文の統一が果たされている句（＝文）を「述体句」と呼び、「呼格体言」によって成立している句（＝文）を「喚体句」と呼んだ。これによれば笹井氏の取り組んできた「非述定文」は「喚体句」にあたる。しかし、本論文は、呼格体言によって成立している文について、山田孝雄博士が喚体句として指摘した文以外にさまざまなタイプの文があることを示し、それらの体系化を目指している。

本論文は内容上大きく三部に分かれ、序論・先行研究概観にあたる第1章、第2章、各論にあたる第3章～第8章、氏の立てた非述定文の諸類型の相互関係を明らかにし、全体的な体系を明示した第9章から成り立っている。以下、本論文の核心である第3章～第9章について内容の要旨を述べる。

第3章では本論文によって「美しい花！」型と名付けられた感動文、第4章では「なんと」型と名付けられた感動文について、川端善明氏の「句的体言」という考え方を導入して多様な実例を収集、検討している。その結果、従来の感動文の漠然とした把握を脱して、精緻かつ構造的な理解を提示し、その形式的なバリエーションを整然と示すことに成功している。また、「美しい花！」型感動文と「なんと」型感動文が形式的に相同的なバリエーションを持っていることを明らかにした。

第5章では「お母さん」「佐藤さん」のように、ある特定の人に対して呼び掛ける「呼び掛け文」を取り上げ、これらは「対象に働きかけ、注意を喚起する機能」を持つこと、この文を構成する名詞は話し手との関係性において「その言語場において特定の個人を指定することができる」意味内容を持つ形式であることを指摘する。また、形式的にはまったく同じであるが呼び掛け文ではない文も存在することを指摘し、これらは「話し手が対象に感じている何らかの情意」を表出した文として感動文との近さを指摘しつつ、感動文としての形式を持つに至っていない未分化の文とする。

第6章では「仕事の振りして遊ぶな ばか者！」「どうかしているのはあなたですわ！恥知らず！」のような文を取り上げ、これらは体言だけで発話されるという点では呼び掛け文に似ているが、呼び掛け文の機能も特徴（特定の個人を指定できるという特徴）も持たないとして、このような発話は対象にレッテルを貼

る行為なのであり、「レッテル貼り文」という文があることを指摘した。レッテル貼り文に用いられる名詞は話し手の対象に対する価値評価を表すことを明らかにし、その上で従来まったく言及されることのなかったレッテル貼り文の形式を整理し、詳細な形式上の分類を示している。さらに、呼び掛け文は「そこのお嬢さん」のようなソ系指示詞との共起がみられ、ア・コ系指示詞とは共起しないのに対し、レッテル貼り文はア・コ系指示詞との共起がみられ、ソ系指示詞とは共起しないことを指摘し、レッテル貼り文という文の種類を立てるものの妥当性を論じている（現代日本語の指示詞は指示機能上、ソ系とア・コ系指示詞の対立がある）。

第7章では「よっ、幸せ者」「このっ、果報者」などの文を「ほめあげ文」と名付け、分析を進める。ほめあげ文の名詞についてはレッテル貼り文の名詞と同様、話し手の対象に対する価値評価を表しており、形式的な特徴も同じである。しかしその価値評価の方向はレッテル貼り文とは正反対であり、またレッテル貼り文とは異なり聞き手に聞かせることを目的とするため聞き手が必須であること、レッテル貼り文のような価値評価に伴う情意の表出はみられないことなどの観察から、ほめあげ文を呼び掛け文の一種として位置付けている。さらに指示詞との共起という点からも、ソ系の指示詞と共起することを指摘し、呼び掛け文の一種として体系化することを根拠付けている。これらの文は形式的には呼掛詞「よっ／いよっ」とともに用いられることが原則であることを指摘し、その上でほめあげ文のさまざまな形式的バリエーションを丹念に整理・分類している。

第8章では「たまこめ——っ」「キヨシのやつ〜」「こいつー」などの文を扱い、これらを貶め文として分析する。貶め文の発話は悪態をつく言語行為であるという点でレッテル貼り文と同じであり、対象に対するネガティブな価値評価を表す点でもレッテル貼り文と同じであることを指摘し、レッテル貼り文とこの貶め文を「悪態文」の下位分類と位置付ける。しかし、レッテル貼り文のネガティブな価値評価には必ず具体性が伴うのに対し、貶め文はその具体性が必要とされない。「——め、——のやつ」という形式、あるいは単にネガティブな価値評価を表す名詞「野郎／こいつ」などによって、レッテルを貼るのではなく、単純に貶めるという行為を表しているとし、この貶め文のさまざまな形式的バリエーションを整理・分類している。

第9章では、それまで述べてきた「体言を骨子とする非叙述文」について、

①聞き手を必ずしも必要とせず、話し手の情意の表出を専らとする「表出文」

②聞き手を必要とし、その聞き手への何らかの働き掛けを伴う「呼び掛け文」

という分類を示し、①「表出文」の下位類を第3章、第4章で扱った「感動文」と第6章、第8章で扱った「悪態文」（第6章では「レッテル貼り文」、第8章では「貶め文」）と位置付け、②「呼び掛け文」の下位類を第5章で扱った「単純な呼び掛け文」と第7章で扱った「ほめあげ文」と位置付けた分類図を示す。このような体系化のもとで、ある特定の体言骨子の文が、どのような形式で、どのような文脈の中で発話されるか、どのような言語場に置かれるか、などによって二種の文にわたって解釈されるその両属的なありようを観察し、整然とした体系を示している。

## 論文審査結果の要旨

本論文のいう「体言を骨子とする非叙述文」については、典型的な感動文以外は従来一語文というような観点から断片的に言及されたり、理念的・観念的に触れられるだけで、実証的な手法で網羅的に調査されたり、分析されてはこなかった。本論文はこれらの分野について、非常に幅広い用例調査に基づく多くの事例の観察とそれらが使用されている言語場や発話行動の分析に裏打ちされた記述によって体系化を試みた労作である。

序章にあたる第1章、先行研究をまとめた第2章を除いた各章は、どの章においてもすべてまず分析対象の言語事実を丹念に拾い上げ、一貫した手堅い手順でその形式的な特徴を分析して、分類を試み、そこから

それぞれの文の体系を描き出している。基本的にはほぼ一語で構成されるこうした文において形式的ないし意味的分類を施すことはきわめて困難であり、それゆえに従来行われてこなかったのであるが、氏が独自の視点で分類して見せた手法はいずれも穏当かつ説得的なものであった。分類に関しては、形式的特徴や機能といった側面に加え、それらの文が成立する言語場のありようや指示詞との共起関係などに注目することによって、文の意味を明示的かつ客観的に捕らえた上での分類になっている。氏の、こうした客観性を重視しつつ意味分析に進む研究姿勢はじつに堅実でありながら、そこから導き出される推論はいずれも新規性に富んでおり、博士学位申請論文としての価値を自ずと示すものであった。そして、今までほとんど気付かれることのなかった体言を骨子とする非述定文（感動文を含む）の諸相、世界が鮮やかに描き出されている点は非常に高く評価できるものであった。

第3章、第4章では感動文を取り上げ、形式的に「美しい花！」型感動文と「なんと」型感動文の二種に分けて論じているが、感動文が事態の持つ属性の「程度の甚だしさ」に対する話し手の感動を表しているとして、その形式的諸類型を整然と示した。そしてどちらの感動文も同じ形式的類型を持つこと、「なんと型」感動文が疑問文とは異質であることを明快に示したことによって従来の感動文研究を大きく前進させた。事実、これらの章のもとになった論文が発表されて以来、常に本研究が参照され、感動文研究に欠かせない礎石となったことは特筆に値しよう。

第5章から第9章にかけては、従来ほとんど分析されてこなかった表現について、上述のように多くの実例を丹念に拾い上げ、そこで用いられる名詞の意味、文の形式や機能の精緻な分析、指示詞との共起関係への目配り、さらに話し手・聞き手を含む言語場の分析を通して、「呼び掛け文」「レッテル貼り文」「ほめあげ文」「貶め文」に分類し、その相互関係を明らかにした。さらにその体系を十分な説得力を持って提示している。中でも「レッテル貼り文」が呼び掛けではないことを明快に示し、対象となる人物に命名としてのレッテルを貼り付けるという言語行為であることを明らかにした功績、レッテル貼り文のみならず、体言を骨子とする非述定文が豊かな表現世界を持っていることを明らかにした功績は大きい。また、形式的に単純な文について、有効な分析方法を示したことは斯界の今後の研究発展に大きく裨益すると考えられる。

しかし、議論が不十分な点もある。特に、従来「喚体の一語文」として論じられてきた、遭遇や発見に伴う情動を表現しているとされる文の位置付けについては、十分に議論が尽くされているとは言い難い。これについては、口頭試問でも指摘された。本論文の根幹に関わる問題であるが、とはいえ、上記の功績はこうした問題を取り敢えず避けることによって達成されたという側面もあり、今後解決してゆくべき課題であろう。他にも論証が十分ではない箇所や、形式上判別できない意味や機能について突っ込んだ分析が避けられる傾向も見受けられたが、これらの諸点も本論文の価値を損なうものではない。

本論文審査委員四名は、論文の審査並びに2020年2月13日に行われた公開論文発表会、口頭試問の結果、学位申請論文「現代日本語の体言を骨子とする非述定文の研究」が「博士（言語学）」の学位を受けるに十分に値するものであると判断したので、以上報告する。